

## 発表要旨

以下の要旨は発表応募の際に提出されたものであることを、予めお断りいたします。

### 1. 長谷川琢哉（京都大学）

「リクールにおける正義の問題      社会的なものと宗教的なもの      」

リクールはその長い哲学的歩みの後半において、正義の問題を集中的に取り組んだ。その際、リクールはロールズにならって正義を「社会的制度の第一の徳」として捉え、さらにそれが「等価性の論理 *logique de l'équivalence*」に貫かれていることを見てとる。つまり、正義とはAに対して等価なA を与えるという論理を原理とするのであり、その原理によって社会は構成されていると考えられているのである。

しかしながら、社会が等価性の論理によって構成されているとしても、それがスムーズに実現されるということとはありえない。リクールが見るところ、人間の行為は他者に対する力の行使という側面を免れることができない。ここに行う者と被る者という不均衡な関係が生じる。社会は等価性の論理によって成立しているはずであるが、実際には様々な不平等、様々な暴力、言い換えれば様々な悪が存在している。ここに解き難いアポリアが生じることとなる。

リクールの哲学が宗教的なものと出会うのは、まさしくここにおいてである。社会が正義を貫く等価性の論理によって、よりよい制度を目的とするとしても、その目的は人間関係の不均衡によって絶えず脅かされる。そして、例えば加害者と被害者というかたちで不均衡がひとたび刻み込まれてしまったら、社会を構成している等価性の論理はいかにして回復されるのだろうか。リクールはここに、何らかの希望を見出さざるをえないと考える。すなわち、「赦し」およびそれを通した「相互承認」の希望である。この希望は等価性の論理という社会の原理をはみ出すものであり、もはや宗教的なものとしてしか考えることができない。リクールはここで働いているものを「満ちあふれの論理 *logique de la surabondance*」と名付け、等価性の論理と区別している。しかしながらこの希望は、やはり社会的な希望であり続けるであろう。というのも、それは社会を構成する等価性の論理の側から要請されざるをえない希望だからである。

以上のように本発表では、リクールの正義をめぐる議論を社会という場面から考察し、そこに宗教的なものとの関係を見出すことを試みる。そしてこのリクールの議論がどの程度説得的であり、現代社会においていかなるアクチュアリティを持つものであるのかを考えてみたい。

### 2. 小野純一（東京大学）

「イブン＝トゥルカにおける顕現の原理      現象学と宗教哲学への寄与をめざして      」

本発表は、イブン＝アラビー（d.1240）に淵源する思想潮流を代表する思想家イブン＝トゥルカ（d.1431/2）の名著『諸原理序説』をもとに、存在と本質、普遍と形象、絶対と顕現や非顕現に関わるイブン＝アラビー学派（存在一性論学派）の主題を描出し、その原理を現象学的に闡明することを企図する。

存在一性論は、啓示（神の存在贈与）と神秘主義体験すなわち絶対者の顕現をギリシア哲学とイブン＝シーナー（d.1037）の伝統に立つイスラーム哲学を援用しつつ、理論付けた。『諸原理序説』

では、顕現の問題が、存在・本質・普遍者・形象・意味・文字・神名との関わりで有機的に論じられる。神名問題は、神学よりはむしろ、文字の問題同様にイブン＝アラビー思想に遡源し、形象はスフラワルディー（d.1191）のプラトニズム的哲学（照明学派）との関わりが指摘できる。普遍者問題はポルフュリオスの『イーサーゴギー』に起源し、直接にはイブン＝スィナー哲学に由来する。

神学者、哲学者、照明論者、存在一性論者は、それぞれ異なる立場を普遍者問題に関し表明している。存在一性論は、啓示＝顕現でいう絶対者が本性的普遍者としての絶対的存在であり、感覚的実体として外的に存在する。この問題が『諸原理序説』では意味・文字・神名の生成との関わりで論じられ、ポルフュリオスへの一つの解答をなす。

『諸原理序説』のこの理論を基に贈与と絶対者の顕現を現象学的に考察することで、宗教哲学にイスラーム思想の側から寄与し、贈与や像の現象学への資料提供も目指す。これは1980年代のファラトゥリーによる伝統的イスラーム神学諸学派を宗教哲学の観点から捉え返す企図を補うものでもある。ファラトゥリーは、神学諸派のみに注目するが、存在、本質、普遍、形象という問題系は、神学の他、法学・哲学・神秘哲学等で基礎論を形成しているからである。

### 3. 笠木丈（京都大学）

#### 「ベルクソン哲学における人格概念の展開」

ベルクソンによる初期の主著、『意識に直接与えられたものについての試論』（以下、『試論』）では、空間的表象によっては捉えられない私の心的状態が持続として見出されるのだが、同時にまた、そうした持続とは私の固有性、すなわち人格であるということが解明される。そして、こうした人格が全的に表現された行為こそが自由であるとベルクソンは主張するのである。

続いて、『物質と記憶』では内面性が記憶として描かれ、人格と同一視される。ただし、同書において『試論』が欠いていた行動の身体性という観点が導入されることによって、記憶という人格は十全に現実化することなく、行動によって制限を受けることとなる。さらに、『創造的進化』においては物質性が創造性に対置されたうえで、個としての存在は物質性の側に置かれる。そのため、『試論』において創造的な持続を体現していたはずの人格という語は、もはや前面に出ることはない。『創造的進化』までのベルクソン哲学の進展において、かつて『試論』で描かれていた人格が全的に表現されるという事態は、身体や物質という契機が際立つにしたがい徐々に後景化していき、次第に人格概念そのものもベルクソン哲学のなかで存在感を弱めていくように思われる。

だが、『二源泉』において事態は一変する。そこではふたたび人格という語が重要性をともなって浮上するのである。すなわち、一方で『試論』から『創造的進化』への道程が自我論から宇宙論への展開であるのに対して、人格概念が焦点化される『二源泉』への歩みは、宇宙論を前提としつつも私という位相にふたたび定位しなおす過程だということができる。しかもそれは単純な『試論』への回帰ではない。神秘家の固有の人格が存在論的な情動のうちに刻み込まれることによって、宇宙論的な拡がりや接点を持つことになる。そのことによって、人格が呼びかけの概念と接点を持ち、みずからのうちで完結する以上のものとされるのである。